

静岡
SHIZUOKA

富士山検定はじまる

一つの地域に絞り知識を問う「ご当地検定」がブームである。京都、金沢、鹿児島などに続き、昨年もう少し範囲を拡大し、静岡、山梨両県にまたがる「富士山検定」が行われ、5,500人が受検するほどの人気を集めた。検定は古くから簿記、珠算など実務検定が知られているが、趣味と実利を兼ねた漢字検定に続き、このところ時刻表、酒など単に知識を押し量る趣味検定の登場が相次いでいる。近年、これにご当地検定が加わり、静岡県内でも本年も実施予定の浜松検定のほか、現在、いくつかの地域限定検定が計画されているほどだ。

富士山検定は、富士山の世界文化遺産登録運動がスタートして1年を迎えたのを機に企画され、実施したのは地元の静岡新聞社・静岡放送、山梨日日新聞社・山梨放送。これに富士市と富士吉田市の商工会議所が名を連ねた。関係者の間で是が非でも実現させたいという世界文化遺産登録の運動を側面から支援し、両県民の意識の盛り上げを図ろうというものだ。

富士山の世界遺産登録は92年、240万人の署名を添えて国会に請願、採択されたが、結果的に登録されなかったいきさつがある。そのため今回の登録運動は、全国支援団体、両県の行政、研究組織、応援民間団体が数多く組織され、長年の悲願を結実させようという強い思いを胸に、以前にも増して運動に力が入る。



富士山検定の設問は「気候」「歴史」「植生」などあらゆるジャンルが対象になり、新聞紙面上とウェブでも申し込みを受け付けた。4回にわたって合計120問の解答を求めた結果、約5,500人が申し込み、70%以上の正解者4,800人に「3級合格証」を送り、併せて今年2月に両県で行う会場検定「2級検定」の参加を呼び掛けた。さて何人が会場を訪れるか興味は尽きない。

検定ブームの一過性を指摘する専門家は多い。確かに、ただ単に面白いからと遊び感覚で開催すると一発芸になりかねない。京都、金沢は観光誘客に結びつけているからこそ、人気を集めているし、やはり目的が必要なのである。富士山検定もしかり。関係者は世界文化遺産登録が実現するまで実施にこだわっていきたいとしている。

神奈川
KANAGAWA

旧吉田茂邸のその後

— 県立都市公園として整備へ —

近代日本政治史の舞台となった「旧吉田茂邸」(大磯町西小磯)が、県立都市公園として保存されることになった。土地は現在の所有者の西武鉄道から県が買い取り、建物は同社が県に寄付する。

同邸は、吉田茂元首相の養父の貿易商健三氏が明治17年に現在地に建設。戦後、元首相が外国の賓客らを招くために、総ヒノキ造り2階建て、延べ床面積約1,000平方メートルの数寄屋風の和風建築を新築した。

画家山口逢春氏と親交のあった、元芸術院会員の建築家吉田五十八氏が設計。京都の宮大工が建築を請け負ったといわれる同邸は、相模湾沿岸や箱根地域に現存する別荘建築の中で規模、質ともに抜きん出ている。

同邸の敷地は約3ヘクタールに及び、うっそうとした緑に覆われている。「七賢堂」と呼ぶ祠もあり、岩倉具視、大久保利通、三条実美、木戸孝允、伊藤博文、西園寺公望、吉田茂の七氏が祀ってある。

元首相存命中は、多くの政財界人が「吉田御殿」と称された同邸を訪ねる「大磯参り」を重ねた。しかし、没後の昭和44年、西武鉄道に売却され、隣接する大磯プリンスホテルの別館となった。

昭和54年には日米首脳会談の会場として久しぶりに政治史上に浮上。その後は公開されることもなく、今回の西武グループ再建策の中では売却対象に挙げられ、地元を混乱に落とし入れた。

県は、明治時代から別荘地・保養地と



県が敷地を買い取り、県立都市公園として整備する方針を固めた旧吉田茂邸

して開けた相模湾沿岸と箱根地域を、邸宅と庭園を組み合わせ「邸園文化圏」と呼称。平成17年度から19年度まで邸園文化圏再生構想を進めている。

これを踏まえて県と大磯町は一昨年11月、国に対して同邸を買い取り、迎賓館として整備・活用するよう要望した。ところが、国は昨年8月、財政状況の厳しさを警備の困難さなどを理由に「極めて困難」と回答。

やむなく県は、敷地を買い取り、同邸に隣接する県立大磯城山公園(約7ヘクタール)と一体化した県立都市公園として整備する方針を固めた。国は、土地代の3分の1、建物改修費の2分の1の補助金を出す予定。

相模湾沿岸のほぼ中心に位置する大磯町には、明治18年に海水浴場が開かれた。2年後に東海道線の横浜～国府津間が開通し、政財界人や文化人がこぞって別荘を構えるようになった。

同町の別荘は最盛期には500棟近くあったといわれるが、現在は旧吉田茂邸を含めて21棟しかない。町民らは、同邸の整備・活用が邸園文化圏の再生、町の活性化につながることを期待している。